

有馬 真喜子氏 | 国連ウィメン日本協会 理事長

社会を動かす民間募金

- 世界の女性が抱える問題から

interviewed by terada mihoko

2

「月

四〇ドルで、百人ものシリア難民女性に、安全な場所を提供でき

きる。」(UNウィメンHPより)

世界規模の支援活動は、国からの拠出だけでなく民間企業、NGOなどの

寄付によって成り立っている。民間で募金されたお金がどのように流れ、社会の問題を解決することになるのか。

NPO 法人国連ウィメン日本協会の理事長、有馬真喜子さんにお聞きした。

有馬さんは、ジャーナリストとして、女性の問題に関わりながら戦後世界の変動をリアルタイムで見つめてきた。

国連機関・女性の地位委員会の日本代表を務め、国を挙げた募金事業、ア

ジア女性基金後述の設立メンバーでもある。NGOやNPO、民間基金に対して人々が募金した「お金」の役割を考える。

有馬真喜子 (ありま まきこ)

1933 年生まれ。57 年に朝日新聞社入社。68 年よりフジテレビのニュースキャスタを務める。

86 年から国連女性の地位委員会の日本代表。95 年アジア女性基金理事、副理事長。04 年ユニファム日本国内委員会理事長。現在、国連ウィメン日本協会理事長。



募金によって、
社会になにか一つの価値、
お金ではない価値を一つ付け加えているのだと思います。

社会の女性の問題について携わるようになったきっかけはなんですか。

私は、十一年間朝日新聞の記者を、十七年間フジテレビのキャスターをやっていました。朝日に入ったとき、女性記者というのは私が初めてでした。四年後に一人入って、その二年後に一人入って。ですからそこは男性社会でした。新聞社の支局には女性用のトイレもなかったくらいです。そういう中で、女性の問題というのは関心を持たざるをえないですよ。置かれている立場には、おのずから日常的に気付かされてきました。

国連関係の仕事との出会いはなんですか？

フジテレビのキャスターをやっていた時に、一九七五年にメキシコで行われた国連の第一回世界女性会議へ取材に行きました。世界女性会議はその後も続き、私は八五年の第三回会議まで取材をしました。取材に行くと政府の人とのやり取りもあり、そこで、国連の女性の地位委員会に行かないかという話をいただきました。それで翌年八六年から九七年まで十一年間、女性の地位委員会の日本代表を務めました

当時、世界の舞台では女性の問題に関して、誰がどのようなことを議論していたのでしょうか。

七五年の第一回世界女性会議には一三五カ国くらいの国が集まりました。当時はウーマンリブが非常にアメリカで盛んだった時期でした。その女性たちが会議に持ち込んだ主張が、例えば、名前につける敬称について。男性はMr、一本なのに、女性はなぜ結婚前はMissで、結婚したらMrsにしなればいけないのか、Miss一本にすればいいのではないかという主張です。かたや、途上国の女性たちにとつての一番の問題は貧困や飢餓です。自分が食べられるか。子供にミルクをやるか。貧困が一番大きな問題でした。非常に活発な議論が行われました。激しい対立があつた中で、このままでいいのかということ、世界の200の側から提案がありました。途上国の女性支援の基金を作ろうという提案です。翌年の七六年の国連総会で各国の満場一致で可決され、国連女性開発基金ユニフェムができました。そして二〇一〇年に、国連の女性関係の機関をすべて統合して、UNWIFEM⁴になりました。

そのUNWIFEMと承認協定を結んだ日本で唯一の団体が、国連ウィメン日本協会ですね。そのミッションはなんですか。

私たちは、途上国の女性支援をしてきたユニフェムのおかげから関わっていますが、UNWIFEMになって、それまで途上国支援だけだったミッションが広がりました。途上国のためにお金を集めて送るだけでなく、国内の女性のリーダーシップや政治の問題、経済的エンパワーメントなど、いろいろなことができるようになりました。そこに一貫してあるのは、「平等・開発・平和」の理念です。さらに今の国連の中心は、「持続可能な開発」SDGs、キャッチフレーズは「誰も取り残さない」です。

日本協会のメインの役割がお金を集めることですよ。

お金を集めて、途上国に送ったり、国連に送ったりしています。多いのは、音楽会などのチャリティイベントをして、その時に訴えかけて、お金を集めることです。目的を伝えると、演奏者や歌手の方々、趣旨に賛同して、安い出演料でやってくださいます。

募金をする人にはどのように伝えているのですか。

頂いたお金がどう使われるかということを見える化することはとても大事だと思っています。『NPOウィメンから、プロジェクトの内容とその成果についての報告書をもらって、私たちは、それをホームページやニュースレターに載せてお金を抽出してくださった方に伝えています。』

女性一般のためではなく、この国の女性のためという方がお金は集まるのでしょうか。

プロジェクトの内容が具体的であればあるほど集まりますね。例えば、二〇一五年のネパール大地震です。『NPOウィメンが現地に入って、被災者の女性のための日用品キットの入った袋を配る活動を始めました。』

そこで日本協会にも呼びかけがありました。袋のなかに入れたものが、まず生理用品です。災害時に、男性が仕切っていたら忘れられることが多いです。それから子供のためのミルク。それから、長袖のシャツ。それから下着。そういうものを入れた袋を『NPOウィメン』が作りました。それともう一つがラントン。清潔な水がないネパールでお湯を沸かしたり、レイプが多発している避難所からトイレまでの道のりを照

らしたり、字を読んだり。日本でもそのための募金をする、あつという間に二四〇万円くらい集まりました。同じ被災の経験があるわけですね、日本人には。

寄付をしようと思ってももらうためには、「なんのために」ということがとても大事です。募金によって、社会になにか一つの価値、お金ではない価値を一つ付け加えているのだと思います。

日本協会には、お金を集めるだけではなくて、第二の活動として、アドボカシー活動があります。ただ知っていただくだけでなく、知ってもらって変える。政府や地方自治体、企業、一般の人に働きかけることで事態が変わっていく。日本では例えば今年の四月に女性活躍推進法が施行されましたが、こういうことも、私たちが見る私たちから見ると、長年のアドボカシー活動の結果のひとつです。

国連ウィメン日本協会は補助金をもらわずに独自で活動をしている。このように社会的ミッションを掲げて社会変改を目指す団体をCivil Society Organization (CSO) ともいいます。お金を稼ぐ企業があるように、CSOも一つのステークホルダーとして社会

に大きな力を持つべきだと、有馬さんは話してくださいました。

民間募金でいえば、かつて日本には国を挙げた大きな募金事業があった。一九九五年設立のアジア女性基金だ。大戦中に日本軍の下で将兵に性的奉仕を強制させられた慰安婦の方に対して、日本の人々からお金を集め、一人二〇〇万円を「償い金」として渡す事業である。有馬さんは、発足から二〇〇七年の解散まで携わってきた。実際にフィリピンへ赴き、元慰安婦の方にその「償い金」を手渡した。

一九九五年の募金では、国民から多くのお金が集まりました。

五億円のお金が集まりましたね。政府と民間とが一緒に何かをやったというのは、アジア女性基金が初めてです。だから、これで本来集まるのかどうか想定もできない状態でした。しかし、「本当に申し訳ないことをした」というお手紙と共に、お金が送られてくるということがありました。



実際にお届けするときは、どのようなお気持ちでしたか。

三点セットと呼んでいて、一つは総理のお詫びの手紙、二つ目が民間の方が出してくださった二〇〇万円の「償い金」、三つ目には、政府拠出による医療福祉支援。私はそれをフィリピン



へ持っていきましました。私が一番驚いたのは、最初にお渡しする時、元慰安婦の三人が見えたのですが、最高の晴れ着を着ていらっしやったことです。花模様の晴れ着を着て。さらに、フィリピンはキリスト教ですよ。元慰安婦の方が、「私たちはあなたたちを許す。なぜなら私たちが人を許さなかつたな

ら、私たちのことを神様が許してくれない。」とおっしゃったことに驚きました。こういう人たちのことを慰安婦にしていたことに申し訳ない気持ちになりました。フィリピンでは二人一人の方が基金を受け入れてくださいました。アジア女性基金では難しかった韓国でも、今、日韓両国の合意で新しい財団ができましたよね。

募金をした日本の人は、お金に気持ちに乗せ、フィリピンの方はそれを受け入れてくれたということですね。その後、お金はどうのような価値を持ったのでしょうか。

そのお金は、フィリピンでは活用してくれました。これで病院に行けるようになったとか、薬をもらえるようになったとか。自分の念願であったサリスストアという駄菓子店を売ったりする小さいお店を開くことができたとかね。そういう手紙をもらいました。二〇〇万円つというお金は、フィリピンの一人の人に差し上げ

た、自由に使つていいお金です。それがその人の暮らしの改善や生きることの改善に繋がった。中には初めて孫に小遣いをあげることができたつていお金がいろいろな形、いろいろな価値に置き換わつていくのよね。

新しい価値に変わり続けることができ、お金の可能性を実感した。社会的ミッションを持つ団体が、新しい価値を具体的に示すことで、人々から集めたお金は、変容し、社会を動かす大きな力となるのだろう。

「社会の問題は、放つておくこともできません。だけど、たまたまその立場にいた人のできることはやるべきだと思つています。いろいろな立場に人がいる時に、その人がやるかやらないかということによって、物事は動くか動かないかが決まることがあるのです。」**大先輩の言葉を胸に、これからお金を稼ぐ社会人となったとき、自分の立場からなすべきことを考え行動できる人になりたいと思つた。**

(取材：八月一〇日 寺田実穂子)

- 1 1946年に、国連の主要機関のひとつ経済社会理事会（経社理）の機能委員会として設立された。政治・市民・社会・教育分野における女性の地位向上に関し、経社理に勧告・報告・提案等を行う。
- 2 現在、1995年の第四回北京世界女性会議が最後である。1975年にメキシコで第一回会議、80年にデンマーク・コペンハーゲンで第2回会議、85年にケニア・ナイロビで第3会議が開催された。
- 3 Women's Liberationの略。1960年代後半にアメリカで起こり世界に広がった女性解放運動。
- 4 2010年、国連総会の決議によって、それまでの4つの女性に関する国連機関を統合して設立された、「ジェンダーの平等と女性のエンパワメントのための国連機関」。本部はニューヨークにある。
- 5 UNウィメンおよび国連ウィメン日本協会の掲げる7つのテーマは以下の通り。1) 女性のリーダーシップと政治参画、2) 女性の経済的エンパワメント、3) 女性・女兒に対する暴力の根絶、4) 女性と平和・安全保障、5) ガバナンス・国家計画と女性、6) 2015年以降の開発課題と女性、7) HIV/エイズと女性。
- 6 行政や自治体に働きかけ、公共政策の形成や変容を促すことで、弱者やマイノリティの権利保護や代弁、特定の問題に対する対処を目的とした活動。